「前回（第111回）研究環境基盤部会及び第86回～第87回学術分科会における主なご意見（研究環境基盤部会関係部分抜粋）

参考資料4
科学技術・学術審議会学術分科会
研究環境基盤部会（第112回）
R5.4.18

（総論）

- 日本の科学技術の総体が弱体化している問題について、すべての分野が一緒くたに論じられることには違和感がある。また、日本の科学技術・学術研究を推進する主体がまず大学になるということに違和感がある。大学は研究機関でもあるが、教育機関でもあり、研究をしていくという点では非常に能率の悪い組織であると思う。そのため、国全体として科学技術力を高めていこうとしたときに、単に大学にお金をつぎ込むのではなく、「企業、国立の様々な研究所、それから大学」という3つのバランスが取れたような施策を行う必要があるのではないか。（86分科会）

- 研究力が他の国に抜かれている状況に関して、研究者の数、研究時間、補助者、URA、技術者、そういうものが非常に重要な点。また、日本の研究現場が設備、装置など世界最先端のものが本当に提供される高度な研究環境にあるのかどうか。国際的な共同の論文とか共同作業がどれだけできているか。研究者のモチベーションというか、米国の研究者に比べて給与が全然少ないという状況。そういうことを総合的に調査して、エビデンスに基づいて何が足らないのかを今後の学術政策の方針にしていくことが非常に重要。（87分科会）

（資金・予算）

- 国際比較をもとに予算を獲得していくことは極めて重要。国際標準に照らして安い日本の報酬など、元から強い機関だけが良い雇用条件を提供できるということでなく、各機関に対する支援を考えるべき。（87分科会）

- あるアジアの国では、分野別に人件費、備品、機器などのそれぞれの価格上昇を加重平均で測定して研究費のインフレ率を計算する。研究インフレ率は一般の消費者物価指数よりも高くなっていて、それで研究関係予算を増やしている。（87分科会）

- 国立大学法人運営費交付金は、平成27年度以降同額程度を確保しているが、一定係数に基づき予算の一部の配分額を減らし、大学固有のミッション実現に向けた取組（組織改革等）に重点的に再配分する仕組みであり、同額でとはいっても中身は徐々に変わっている。大学運営上の非効率な部分を削減することにも限界があり、経常的な事業も削減せざるを得ないところ、ミッション実現に向けた取組を支える別途の財源を確保するべきではないか。（86分科会）

- 基盤的経費と競争的資金のバランスが崩れており、それに伴いデュアルサポートシステムが健全性を失っているのではないか。健全にデュアルサポートシステムが稼働するには、それを測る指標が必要で、どのように健全性を測るかということを考えるべきではないか。（86分科会）

- 財源の担保がないままに大学にガバナンス強化を求めたところ、特別事業に予算を投じる反面、広く薄く配分していた各研究室の研究基盤研究費はもうほとんどない。結果的に、科研費の例えば基盤研究Cや若手研究などがデュアルサポートの肩代わりとして使われてしまう。そういった足腰を、財源を投与してしっかりとつくっていくべき。（86分科会）

- 学術振興に必要なのは、人とモノと金。資金は、量を増やすだけではなく、競争的資金の獲得等で研究者が疲弊している状況を踏まえ、持続性があって裁量性の高い資金を与えなければ研究力は上がらない。（87分科会）

- Joint－Call型の、相手方の国のファンディングエージェンシーとタイアップして、それぞれに研究資金支援が来る、本当の意味のバイラテラルの形の大型の事業を今以上に支援・推進していくことが非常に重要。（87分科会）

（大型先端研究・研究設備・共同体制）

- 共同利用装置の設備が重要であるが、これらの老朽化に対する維持、継続的な高度化に対して支援が必要。基本的に日本はスクラップ・アンド・ビルドが好きで、まず壊したがるが、そうではなくて維持することとその高度化という観点が必要。（86分科会）

- 研究力が他の国に抜かれている状況に関して、…（略）…日本の研究現場が設備、装置など世界最先端のものが本当に提供される高度な研究環境にあるのかどうか。…（略）…そういうことを総合的に調査して、エビデンスに基づいて何が足らないのかを今後の学術政策の方針にしていくことが非常に重要。（87分科会）

- 【一部再掲】大型学術研究フロンティア促進事業に関して、他の国が予算を増やす中で、日本が得意とする大型装置の世界最先端の地位が少し脅かされかねない状況にある。あるアジアの国では、分野別に人件費、備品、機器などのそれぞれの価格上昇を加重平均で測定して研究費のインフレ率を計算する。研究インフレ率は一般の消費者物価指数よりも高くなっていて、それで研究関係予算を増やしている。日本がそれについていかないと、なかなか知恵だけでは勝てなくなってきている。（87分科会）

- 我が国の研究の最先端のところに大型研究施設があり、ここで研究することが我が国の研究を常にトップを維持するということにもなる。ここでの人材育成が大事で、海外からこの技術を学びたい人がたくさん集まってきて、学んで戻っていくということをしている中で、ここに日本の層を厚くしていくことも大事。（86分科会）

- 各法人や各機関はそれぞれ国際協定を結んでいると思うが、（大学共同利用機関法人4機構と総合研究大学院大学のように）日本の学術に関する研究所が基本的に集まってアライアンスをつくったとなると、国際的なアピールについて、様々な形で海外の機関との提携、包括協定などで実績を積み上げていくことも重要。（111部会）

- 「チームサイエンス」と「ビッグサイエンス」というキーワードが重要。理系にとっては当然の概念だが、人文系においてもこれからは重要になるのではないか。社会的課題に応じたイノベーションを起こす上でも必要だが、すぐに役立つのではなくゆっくり役立つような、学術の指向性が強い課題に対応するときにも必要になる概念。（86分科会）

（学際ハブ形成事業等）

- 大学共同利用機関、共同利用・共同研究拠点は、日本に非常に特徴的なシステムで、研究力向上に非常に大きな貢献をしている。学際ハブ形成事業については、大学共同利用機関と共同利用・共同研究拠点が協力して一緒になって一つのハブを形成して、新しい機能を切り開く形も考えていくべき（86分科会）

- 国際卓越研究大学を目指している大学に所属する共同利用・共同研究拠点に関して、共同利用・共同研究拠点は大学の枠を超えたアクティビティーを担っており、分野によってはそういう機関が入らないとネットワークが組めないことも生じてくる。もし国際卓越研究大学に認定されたら予算は御辞退するという形も可能かと思うので、計画段階で、そういうネットワークが組めないようなことにはならないように工夫が必要。（111部会）

- 新しい分野をつくっていくために、例えば大学共同利用機関のような少し大きめのところがハブになって、非常に類似の共同利用・共同研究拠点がアライアンス的に連携し、そしてそのハブが多分野のもの、異分野のものとつなげていく、こういう構造も可能となるようにすべき。（111部会）

- 地域中核・特色ある研究大学総合振興パッケージについては、地方に根差し地方に貢献する地方大学を中心に支援していくニュアンスが薄れている印象がある。（87分科会）

（人材（研究支援者、技術者等））

- 若手研究者と言ったときに、アカデミアのキャリア一筋の人だけということが前提になって議論するのは、社会から見たときに、ちょっと偏っているのではないか。（87分科会）

- 大学院の在り方としても、アカデミックスクールとして研究者養成だけに特化するのではなくて、プロフェッショナルな養成ということも議論していくべき。（87分科会）

- 研究力が他の国に抜かれている状況に関して、研究者の数、研究時間、補助者、URA、技術者、そういうものが非常に重要な点。…（略）…そういうことを総合的に調査して、エビデンスに基づいて何が足らないのかを今後の学術政策の方針にしていくことが非常に重要。（87分科会）

- 研究費を数百万円割り当てたときに、テクニシャンを雇うとか、秘書を雇うとか、具体的にどう使いたいのかニーズを調べたほうがいいのではないか。（86分科会）